

保護者が認知する保護者およびその子の運動特性と体力との関係

山田悟史¹⁾・木村憂子¹⁾・香村恵介²⁾・漁田俊子¹⁾・大沼博靖¹⁾・住田 健¹⁾

Correlation between characteristic of physical movement of infants recognized by their guardian, characteristic of physical movement of guardian themselves and physical fitness of infants. Satoshi YAMADA, Yuko KIMURA, Keisuke KOMURA, Toshiko ISARIDA, Hiroyasu ONUMA, Ken SUMIDA

Abstract : The purpose of this study was to investigate “Correlation between characteristic of physical movement of infants recognized by their guardian, characteristic of physical movement of guardian themselves and physical fitness of infants”. The subject of the analysis were 43 infants and their guardians that take part in “kids sports school of Shizuoka-Sangyo-University”. The results are follows:

1. Between characteristic of physical movement of infants recognized by their guardian and characteristic of physical movement of guardians recognized by themselves is not found correlation.
2. Correlation between characteristic of physical movement of infants recognized by their guardian and physical fitness of infant is found moderate correlation.
3. Correlation between characteristic of physical movement of infants that play with their mother well recognized by their guardian and physical fitness of infant is found more correlation than preceding clause.

Keyword: 幼児、体力、認知、保護者

I. 緒言

ことわざにも「かえるの子はかえる」などとあるように、親の特性が子に引き継がれることは経験上少なくないように感じる。筆者も昔水泳をしており、娘がプールに通っていることを周囲に伝えると、「さぞお父さんに似て、水泳の才能があるのでしょうかね」のようなコメントをされることは多い。そういった意識を持って日常の中で周囲と話をしていると、同様なことはよくある事だと改めて気づかされる。このように親が何か特技的なものを持っていたり、特殊な才能などを持っていると、その子もその才能や特性を引き継いでいるだろうと一般的には想像しやすいのかもしれない。その他に「この親にして

この子あり」「瓜の蔓に茄子はならぬ」「燕雀（えんじゃく）鳳（おおとり）を生まず」「この親にしてこの子あり」など同じ意味を持つことわざはいくつもある。

一方で「トンビがタカを生む」ということわざもあり、親とは似ても似つかぬ特性を子が持つこともあるのも昔から知られているようである。同様のことわざに「百舌（もず）がタカを生む」「トンビがクジャクを生む」などがあるが、カエル（似たもの親子）のことわざと比べて、あまり表現に多様性がないように感じる。

しかし、この2つの対義することわざが使われるときの文脈を見ると、若干その使われ方は異なる。カエルのことわざは、『やはり

1) 静岡産業大学経営学部
〒438-0043 静岡県磐田市大原1572番地1
2) 京都文教短期大学幼児教育学科
〒611-0041 京都府宇治市槇島町千足80

1. Shizuoka sangyou university
1572-1 Owara, Iwata, Shizuoka
2. Kyoto Bunkyo Junior College
80, Senzoku, Makishima-cho, Uji-shi, Kyoto

カエルの子はカエルだな』と『やはり』をつけてよくあるニュアンスで使われることが多いのに対し、トンビのことわざは、『トンビがタカを生むこともあるのだな』などと珍しい事象が起きたかの様なニュアンスで使われる事が多い。このことから一般的には、子は親の特性に似るものであるが、時には違う特性になる事もある、というのが現代に至るまでのイメージなのかもしれない。しかしながら、それは生まれつきの特性なのか、それとも環境で育まれる特性なのか、複合的なのか複雑である。

上記のように、保護者が自身の子の身体運動の能力（運動の好き嫌いや体力）に対して、自分の特性と同じように感じている事が多いのか、それとも違うように感じていることが多いのか、そしてその子に対する認知と実際の体力にはどのような関係があるのか、まだわからないことが多い。

そこで、本研究では、保護者が自分の子の運動特性を自分自身や配偶者の運動特性と同様に見ているのか、そうではないのか、さらには保護者が認知する子の運動特性が実際の運動能力（体力測定の結果）とどのような関係にあるのかを調査した。

II. 運動特性の調査

静岡産業大学経営学部で行われているキッズスクールでは、毎年幼児の体力測定を行っている。年中クラスと年長・小1クラスに所属する幼児45名（男児21名、女児24名）の保護者に対し、自分の子と保護者自身および配偶者について運動の得意不得意の認知を調査した。具体的には、「お子さん（あるいは母親、父親）は運動が得意だと思いますか」という質問に対し、「得意」「やや得意」「やや苦手」「苦手」の4段階で回答してもらった。また、回答者が母親か父親かの回答も得た。それに加えて、「お子さんと普段よく遊ぶ相手は誰ですか」という質問に対し、「母親」「父親」「祖母」「祖父」「その他」で回答してもらった。

なお、体力測定結果の研究への利用および個人情報取り扱いなどについては、キッズ

スクールへの参加時に同意を得ているが、今回の研究にあたり、研究への参加の任意性も含めてアンケート時に改めて説明を行い、同意を得た。

III. 体力測定とその評価の方法

体力測定の項目は、「25m走」、「握力」、「立ち幅跳び」、「反復横跳び」、「体支持持続時間」、「ボール投げ（ソフトボール）」、「長座体前屈」の7種目とした。体力測定の評価は、年齢の影響が強く出るため測定値そのものではなく、春日晃章氏（岐阜大学）が開発した「幼児体力評価プログラム」（竹井機器工業製 T.K.K.5820）を用いて、各種目を5段階で相対的に評価した。このプログラムは、幼児の年齢を半年ごとに区切り（例えば4歳、4歳半、5歳）、その中で「5」を最上層、「1」を最下層として5段階評価するものである。

そのプログラムにより、7種目それぞれの評価を算出すると同時に7種目の5段階評価の平均値として「評価平均値」を算出した。

IV. 保護者が認知する運動特性の調査結果

対象者45名のうち、5名の回答には無回答や不適切値があり無効としたため、有効回答数は40であった。そのうち、「子の運動特性」を実際の体力評価（評価平均値）より過大に評価した保護者は49%、ある程度一致した保護者は39%、過小に評価した保護者は11%であった。これは先行研究（福富恵介、春日晃章「保護者のわが子に対する主観的体力評価と実際の体力水準の一致度:幼児期を対象として」、2012）¹⁾の過大評価58%、過小評価8%と比較しても妥当であるといえる。

回答の平均値および標準偏差を表1に示す。「子の運動特性」と「母親の運動特性」・「父親の運動特性」の平均値の差を検定した結果、母親とは有意差が有り（ $p<0.05$ ）父親とは有意差が見られなかった（ $p=0.173$ ）。

また、「子の運動特性」（子どもは運動が得意か？）についての回答者として、「父親

が回答」したのは2名のみで、他は全て「母親が回答」していた。「母親の運動特性」について回答したのは、全て「子の運動特性」を回答した保護者であった。従って「子の運動特性」と同じく「父親が回答」が2名、「母親本人が回答」が38名であった。「父親の運動特性」については、「父親本人が回答」としたのは15名、「母親が回答」としたのは25名であった。

以上のことから、母親は自分の特性と子の特性は違うと冷静に認知しているのではないと思われる。かといって父親が自分の特性と子の特性が同じと認知しているかどうかは、回答者が父親本人である場合と母親が代わって回答している場合が混在しているため、判断できない。また、母親は、自分よりも父親の運動特性に近いと回答する傾向も示唆される。

これは本研究とは直接関係はないが、子について父親が回答した場合、母親の特性も父親が回答しているが、子について母親が回答した場合、父親の特性は4割近く父親本人が答えているという差が見られた。子について父親が回答した件数は2件のみであるため、これはたまたまなのかもしれないが、興味深い現象である。

表1 保護者が認知する運動特性の回答結果
Table1. Results of motor characteristics
recognized by guardian.
(n=40)

項目	平均値	標準偏差
子の運動特性	3.125	0.125
母親の運動特性	2.7	0.144
父親の運動特性	3.35	0.132

V. 体力測定の評価平均値に対する運動特性との関連

体力測定で行った7種目それぞれの5段階評価を平均したものを「評価平均値」とした。その「評価平均値」と「子の運動特性」および「母親の運動特性」、「父親の運動特性」との相関（ピアソンの積率相関係数）を求め

た。その結果を表2に示す。

表2 体力測定の評価平均値に対する相関係数
Table2. Correlation coefficient to evaluation
average value of physical fitness measurement.
(n=40) (※:p<0.05, ※※:p<0.01)

項目	相関係数	p値
子の運動特性	0.518	0.001※※
母親の運動特性	0.256	0.111
父親の運動特性	-0.07	0.664

その結果、「父親の運動特性」との相関よりも「母親の運動特性」との相関が高い関係となったが、両方とも有意な相関ではなかった。「子の運動特性」と「評価平均値」との相関のみが、有意な中程度の相関であった。

次に、「一番よく遊ぶ相手」として「母親」と回答した28名に対象者を絞り、相関を求めた。その結果を表3に示す。なお、父親が「子の運動特性」に回答したのは1名で、それ以外の27名は母親が回答者であった。

その結果、母親とよく遊ぶ子であっても、「評価平均値」と「母親の運動特性」との相関はとくに高くはないが、「評価平均値」と「子の運動特性」との相関は高くなった。このことから、「親の運動特性」が幼児期には「子の運動特性」として現れることは多くないと言え、母親とよく遊ぶからといって、母親の運動特性が子にも現れるとは限らない。しかし、子供とよく遊ぶ母親は、子の運動特性について良く認知しているということだろうと考えられる。

表3 一番よく遊ぶ相手に母親を含む子の評価平均値に対する相関係数

Table3. Correlation coefficient to evaluation
average value of physical fitness measurement of
infant that play with mother the most.
(n=28) (※:p<0.05, ※※:p<0.01)

項目	相関係数	p値
子の運動特性	0.638	0.0003※※
母親の運動特性	0.281	0.148
父親の運動特性	0.024	0.905

VI. 子の運動特性と各種目の評価との相関

前項において、体力測定「評価平均値」と「子の運動特性」との相関が見られたが、ここでは、体力測定を行った7種目それぞれ評価と「子の運動特性」の相関を求めた。その結果を表4に示す。また、前項と同様に「母親とよく遊ぶ子」に絞った場合の相関を表5に示す。

表4 子の運動特性に対する各種目の評価との相関係数(全体)

Table4. Correlation coefficient to each value of physical fitness measurement. (All subjects) (n=40) (※:p<0.05, ※※:p<0.01)

種目	相関係数	p値
25m走	0.346	0.106
握力	0.284	0.190
立ち幅跳び	0.452	0.030※
反復横跳び	0.226	0.301
体支持持続時間	0.439	0.036※
ボール投げ	0.264	0.223
長座体前屈	0.179	0.414

表5 子の運動特性に対する各種目の評価との相関係数(母親とよく遊ぶ子)

Table5. Correlation coefficient to each value of physical fitness measurement. (infants that play with mother the most) (n=28) (※:p<0.05, ※※:p<0.01)

種目	相関係数	p値
25m走	0.474	0.022※
握力	0.435	0.038※
立ち幅跳び	0.539	0.008※※
反復横跳び	0.198	0.364
体支持持続時間	0.560	0.006※※
ボール投げ	0.426	0.043※
長座体前屈	0.275	0.203

その結果、「反復横跳び」を除き、全体における各種目の評価と「子の運動特性」との相関よりも、母親とよく遊ぶ子における各種目の評価と「子の運動特性」との相関の方が高くなった(表4、表5)。

また、母親とよく遊ぶ子における各種目の評価と「子の運動特性」との関係では、反復横跳びと長座体前屈以外で、有意な中程度の相関が見られた。その中でも「体支持持続時間」と「立ち幅跳び」の関係は相関が高く、有意性も高い(p<0.01)。小さな子はジャンプが好きで、様々な場面でジャンプして遊んでいる姿を見かける。そのため、この結果から、母親は子がジャンプする姿などを見て、運動が得意そうだと判断しているのではないかと想像するのはたやすい。しかし、一方で「体支持持続時間」との相関の高さは、何に由来するのかは想像しがたく、この点については、今後の研究課題としたい。

VII. まとめ

今回は運動特性の認知についてとくに2つの調査を行った。

まず、保護者が自分自身や配偶者、子(幼児)の運動特性(運動が得意か、苦手か)をどのように認知しているかアンケート調査し、それぞれがどのような関係にあるのか調査した。それぞれの運動特性を平均値の差の検定により分析し、その結果、「子の運動特性」と「父親の運動特性」には有意差はなく、「子の運動特性」と「母親の運動特性」には有意差が認められた。アンケート調査への回答はほぼ母親であることから、母親は、自分の子に対し「自分の運動特性」と「子の運動特性」は同じとは考えていないことが示唆された。またその一方で「子の運動特性」は「父親の運動特性」に近いと認知している可能性があることも示唆された。

もう1つ、保護者が自分自身や配偶者、子(幼児)の運動特性(運動が得意か、苦手か)をどのように認知しているのかと、実際の体力測定の結果との間にどれくらい関係があるのかを、スピアマンの積率相関係数を元に調査した。体力測定の総合的な評価とし

での「評価平均値」に対する「子の運動特性」、「母親の運動特性」、「父親の運動特性」との相関を見た結果、「子の運動特性」、「母親の運動特性」、「父親の運動特性」の順に相関が高く、「子の運動特性」のみ有意な相関が見られた。さらに、子どもがよく遊ぶ相手として「母親」と回答した28名に絞って、同様に相関を見た結果、「評価平均値」と「子の運動特性」の相関はさらに高くなった。つまり、「親の運動特性」は幼児期の「子の運動特性」にはほぼ関係しないが、「子の運動特性」についてはある程度把握していることがわかった。とくに、子どもとよく遊ぶ母親は「子の運動特性」についておよそ正しく把握していることが示唆された。

また、体力測定で行った7種目(25m走、握力、立ち幅跳び、反復横跳び、体支持持続時間、ボール投げ、長座体前屈)個別の評価値と「子の運動特性」、「母親の運動特性」、「父親の運動特性」との関係を見た結果、全体では「体支持持続時間」と「反復横跳び」で有意相関が認められ、母親とよく遊ぶ子のグループでは、「反復横跳び」と「長座体前屈」以外で有意な相関が認められ、「体支持持続時間」と「立ち幅跳び」において高い有意性が見られた。このことから、幼児が好きなジャンプを見て「運動が得意なのかな」などと理解しているのではないかと想像できるが、「体支持持続時間」との関連を示すものは何かというのは想像が難しく、子の結果に対する考察を深めるためにはさらに研究を進める必要がある。

今回は、幼児期の運動特性についての調査であった。「カエルの子はカエル」ということわざには「カエルは子ども時、親ガエルとは似ても似つかぬオタマジャクシという形態を持っているが、成長するにつれ親と同じカエルになる」という意味も含まれている。幼児期から小児期、青年期、成人へと成長するにつれ、その特性が変化していくのか、そしてその変化は環境的なものなのか、それとも遺伝的な発現によるものなのか、今後調査を行っていきたい。

また、今回は、対象が静岡産業大学のキッ

ズスクール(運動遊びのスクール)に参加する子とその保護者であったため、もともと子の運動について意識が高い可能性も否定できないが、親の運動特性と幼児期にある子の運動特性の間に相関がないことは、環境の重要性を示唆していると考えられる。

【参考・引用文献】

- 1) 福富恵介、春日晃章「保護者のわが子に対する主観的体力評価と実際の体力水準の一致度:幼児期を対象として」発育発達研究、第56巻、pp1-8、2012
- 2) 木村拓磨、武田直之、早川健太郎、佐々木俊郎「幼児の体力・運動能力と行動傾向及び保護者の運動への支援態度との関連」子ども学研究論集、第9巻、pp45-54、2017
- 3) 出村友寛「幼児の体力測定結果や運動遊びの取り組みの報告が保護者の意識や行動に及ぼす影響」仁愛女子短期大学研究紀要、第47巻、pp39-44、2015
- 4) 香村玲奈、春日晃章、福富恵介「幼児の体力、運動能力と保護者の遊びや運動に関する養育態度との関連」岐阜大学教育学部研究報告、35巻、pp147-151、2011

